

銭形平次捕物控

二本の脇差

野村胡堂

青空文庫

「親分、大変なものを拾つて来ましたぜ」

八五郎のガラツ八は、おやゆび 拇指をまむし 蝮にして、自分の肩越しに入口の方を指しながら、日本一の突き詰めた顔をするのでした。

「何だ、八、小判か、銭か」

銭形の平次は置き炬燵ごたつに尻を突込んで黄表紙を拾い読みしていたのです。

「そんな物じゃねえ、人間ですよ、親分」

ガラツ八の真剣さ。

「夜鷹よたかなんか拾つて来やがると、勘弁しねえよ。薪雜棒まきざつぼうで向う脛むこずねをかつ払つて、西の海

へ叩き込んでやるから」

荒っぽいことを言いながらも、平次はニヤリニヤリと笑っているのです。

「そんな代物しろものとは訳が違う。ね、親分、ちよつと逢つてやっておくんない。永代えいたいから身を投げそうにしているのを、一生懸命なだ宥めすかして、ここまで伴つれて来たんじゃあり

「ませんか」

「女か、男か」

「両方で」

「何？」

「相對死（心中）のやり損ねですよ、親分」

「つまらねえものを拾って来やがったものじゃないか、そいつが知れると、日本橋の袂たもとに曝さらされる代物だぜ」

心中のやり損ねは日本橋の高札場の下に三日も生き恥を曝された時代です。

「日本橋の高札場なら我慢も出来るが、鈴ヶ森の処おしおき刑台に曝されかけているんだそうで」

「何だと？、八」

「こいつは拾いものでしょう」

「フーム」

平次は炬燵から這はい出しました。奥も入口も狭い狭い家、膝行寄いざりよつて、いきなり障子を開けてみると、サツと路地を吹き抜く風が、まともに平次の額を叩きますが、入口の格子は銀鼠色ぎんねずいろに月光に開け放たれたまま、そこには心中の仕損ねどころか、季節物の恋猫の

片割れも見えません。

「八、誰も居ねえぜ」

「そんなはずはないんだが——」

平次の後ろから八五郎、格子の外を月に透かして仰天しました。

「あッ、居ねえ」

「手前てめえ、永代から水死人の幽霊でも拾つて来たんじやあるまいね」

平次の声は少し怪談調子になりました。

「脅かしちやいけねえ、確かに足は二本ずつありましたよ」

「怪物えてもものは足ぐらい融通して来るよ、——その辺の畳が濡れているかも知れねえ」

「親分」

八五郎も蒼あおくなりましたが、それより驚いたのは、お勝手元で働いていた若い女房のお静でした。思わずキヤツと悲鳴をあげると、濡れた手も拭かずに茶の間へ飛込んで来たのです。

「何て騒ぎをするんだい。幽霊よりお前の声の方がよっほど虫の毒だぜ」

平次はもうケロリとして笑っております。

「だって怖い話をするんですもの、私はもう——」

お静は胸を押さえておりました。

「親分が悪いや。つまらねえ事を言つて、脅かすんだもの。畳なんか濡れているものですか、——心中仕損ねの二人が、ここまではあつしと一緒に来たが、錢形の親分の家と聞かされて、驚いて逃げ出したんですよ、馬鹿馬鹿しい」

ガラツ八は漸く常識を取戻すと、二人の人間の紛失に理由を付けました。

「それほど先が見えるなら、何だつて格子の中へ入れてから、俺を呼出さなかつたんだ。話の様子じゃ、だいぶこんがらかつた筋のようじゃないか」

「驚いたね、親分。まさか心中の仕損ねが、逃げ出そうとは思いませんよ」

「相手の素姓が判つているのか」

「嘘か本当か知らないが、一と通りのことは訊きましたよ」

「そんなら、あわてるにも及ぶめえ、ここで経緯いきざつを話してみないと平次。」

「そんな事をしているうちに、また心中のやり直しをしませんか、親分」

「永代からここまで来るうちに、寒さが骨身に徹こたえるよ。もう一度ドンブリやらかす気に

はなるめえ、北風がいい意見だよ」

「へエ——」

「外の理由ほかわけがあるならとにかく、あいたいじに相對死の仕直しをやらかす陽気じゃねえ、たいがい大丈夫だろう」

と平次は呑込み兼ねたガラツ八のために註を入れました。

「でしようか」

「死にたがっていたのは男かい、女かい」

「女の方で」

「男の方は」

「あまり気の進まない様子でしたよ」

「それじゃ大丈夫だ、男が死ぬ気になると、女を引摺って行くが——」

「へエ——」

「ところで、二人はどこどこの誰だったんだ」

「坂本町の丸屋の娘と、町内の専次とかいう若い男で、建具屋の息子だそうで」

「何？ 丸屋？ あの日本橋の坂本町のか？ そいつは大変だ、昨夜ゆうべ女主人のお米よめが殺さ

れたじゃないか」

「その養い娘のお夏が、青物町の久三郎きゆうざぶろう親分に親殺しの疑いで縛られそうになって飛出したんだって言いましたよ」

「行ってみよう、八、話は歩きながらでも聴ける」

平次は煙草入を腰に、——夜風の寒い路地へもう飛出しておりました。

「待つて下さい、親分」

続く八五郎、——そんな事には馴れたお静ですが、この晩ばかりは泣き出しそうな顔で二人を見送っております。——万一畳が濡れていたらどうしよう——そんな事を考えていたのです。

二

話は一と晩前の事件に戻ります。

日本橋坂本町に、二十年前に死んだ夫の仕事を承継いで、大きな一代身上を築き上げた、女金貸の丸屋お米というのが住んでおりました。

脂ぎって、精力的で、ちよつと見は四十七八でしたが、——もうすぐ五十五だから——と口癖のように言っていたのをみると、たぶん五十四だったでしょう。とにもかくにも、自分の歳のサバを読むような、生優しい女ではなく、冷酷で、押しが強く聡明で、強慾くで、高利貸に生れ付いたような、逞たくましい心の持主でした。

そのお米が、あまり立派でない——實用一点張りの殺風景な二階で、一刀の下に刺し殺されていたのを、お米の遠縁で、二三年前から居候している茂七もしちという三十男が見付けたのです。

ところで、その見付けようがまた、恐ろしく変つておりました。ガラツ八の言葉で説明すると、

「居候の茂七が、あんまりひどい小言を食らった上、その晩にも追出されそうなので、お米を脅かすつもりかなんかで、質物の脇差のうちから、一番よく光る大ナマクラを持出し、そいつを抜身ぬきみのままブラ下げて、二階で帳合せをしているお米の部屋へ飛込むと、——肝腎のお米は——と足先に入った曲者くせものに刺し殺されていたんだそうです」

「なるほどそいつは変つているな、——曲者はどうしたんだ」

「茂七は逃げて行く曲者の後ろ姿をチラリと見た——と言いますが、二階は四室まもある上、

廊下あかりに灯がないから、男か女か、それさえ判らなかつたそうで」

「青物町の久三郎あにい兄哥は、茂七を挙げなかつたのかい」

「茂七の持つていた脇差には毛ほどの汚点しみもないが、お米婆さんの傷は、左貝殻骨の下から、胸まで通るほどの凄しみい突きで、茂七の持つていた、大ナマクラなんかじゃ、綿入れ一枚通すのもむつかしいと言いうんだそうですよ」

「フーム」

「青物町の親分は、一番先に養い娘のお夏に目を付けました。お夏はお米の姪めいで、手塩にかけて育てた娘ですが、近頃町内の建具屋の倅せがれの専次と出来てしまい、人橋を架けて、嫁にくれるか、婿に入るか、どちらでも構かまわないから添そわせてくれと申ま込んだが、お米婆アいつかな聴きき容ゆるれません。母親の目を盗ぬすんで、大それた約やく束そくなんかする相手とは、私の眼の玉の黒くろいうちは、一緒いっしょにすることはならねえと」

「……………」

「お米婆さんの眼の玉が白しろくなると、下手人の疑うたがいは一番先にお夏に掛かる道理道理じゃありませんか」

「専次は？」

「その晩尺八の復習で、丸屋の隣の竹支齋ちくしさいの家で、宵から鼻の下を長くして尺八を吹いていたんだそうで、人なんか殺す暇のなかったのは、二十人もの人が見張っています」

「で？」

「お夏が縛られそうになると、専次と二人で飛出してしまいました。縛られるくらいなら死んだ方がいいとか何とかで、気の進まない男を口説いて、永代まで来たところを、あつしに見付かつたんで」――

ガラツ八は、ありつたけの聞込みをさらけ出して、耳の後ろをポリポリと掻きました。その大事な二人、心中仕損ねのお夏専次を逃がしてしまったのは、何としても面目が相立ちません。

これだけの説明を聴くうちに、平次と八五郎の足は、神田から日本橋へ、一気に駆け付けておりました。もう戌刻半いっつ（九時）過ぎでしょうが、しもたや造りながら、店構えの大きい丸屋は、火の消えたような静寂のうちに、何となく不気味を押し潰つぶしたようなザワめきを孕はらんでおります。

「八、あれがお夏とかいう娘じゃないか」

平次は丸屋の向う側、もう大戸を閉めた店先の隈くまを指しました。

「あッ、有難え、死なずにいましたよ、親分」

八五郎は飛付くように、脅え切った娘の方へ進みます。その退路を絶つように平次。

「おどかすなよ、八、すっかり顫ふるえ上がっているようだ」

静かに娘の顔を差しのぞきます。

「何だつて親分の家の前から逃出したんだ、とんだ心配をしたぜ」

とガラツ八は、少し噛み付きそうです。

「済みません」

お夏の消えも入りたい風情を、平次はあわれに見やりました。店先の隈を出ると、満面に青白い月を浴びて、十八娘の可愛らしさが、この上もなく効果的に見えるのでした。

「まあ、いいやな、久三郎兄哥あにいの手を逃れてこの平次の手に捕まっちゃたまるまいと思つたらう、——でも、ここへ戻つたのは感心だ。万事は俺が吞込んでいるから、一緒に入るがいい」

お夏は僅わずかにホツとした様子です。若さにも美しさにも似ぬ粗末みなりな身扮ですが、全身から発散する魅力は、かえって楚々として人を動かします。

「専次はどうした」

「一緒に来るといふのを、——それではかえって具合が悪いから、そこで別れました」

お夏の声はともすれば恐怖に絶えるのでした。

「それもよかろう、さア、万事は俺に任せるんだぜ、解ったか」

「ハイ」

平次を先に、お夏を中に挟んで、ガラツ八しんがりが殿を勤め、丸屋の、不安と疑懼ぎくとを包む空気の空へ入って行きました。

「御免よ」

「どなたで？ 今晩は取込みがございますが——」

番頭らしい実じつてい体な四十男が顔を出しました。

「神田の平次だが——」

「あ、銭形の親分さん」

番頭は立ち辣すくみました。その後ろからヌツと顔を出したのは四十五六の小作りながら鋭

い感じの男。

「何だ何だ、お、錢形の兄哥あにきじゃないか。たいそう良い鼻だね」

青物町の久三郎です。平次の姿を見ると、競争意識が一ぺんに内証ないこうして、サツと顔を曇らせるといった男です。

「そんなわけじゃねえ、——永代から身投げをしかけた娘があつたから、危ないところで止めて、送り届けて来たまでさ」

「えッ、その娘が、——あの、身投げをしたというのかい」

「何だか知らねえが、縛られるくらいなら身を投げて死んだ方がいいという料簡りょうけんだ。

若い娘というものは、兄哥の前だが付合にくいね」

平次はさり気なく言いながらもこの事件に少なからぬ興味を持っている様子です。

「急に見えなくなるから、とんだ心配をしたぜ」

久三郎は照臭そうに、お夏の機嫌をとりました。

「ところで、修業のためだ。ちよいと現場を覗かしちや貰えまいかと平次。」

「あ、いいとも、どうせ錢形の兄哥の智恵も借りなきやなるまい。殺しがあつてから、ま

る一日一と晩経つが、まるつきり眼鼻が付かねえ」

久三郎は少し苦い顔をしましたが、口前だけは器用に、平次の望みを容れられました。とんだ目違いで、お夏を狙ったばかりに、危うく娘一人を殺し損ねたのが、さすがに老巧な御用聞の気を挫いたのでしよう。

「お葬式はまだかい」

と平次。

「遠い親類があるそうで、明日もむつかしかろうと言うよ。お通夜の衆に遠慮して貰つて、仏様を見るか」

「いや、それには及ぶまい。左貝殻骨の下から、胸まで突き刺す手際じゃ、娘の仕事でないことは判り切っているから」

久三郎はもう一度苦い顔をしました。奥の一と間に集まったお通夜の衆は、世間体を憚つて、本当の近親ばかり、平次はその中に交つて、百万遍の数珠を繰ったり、線香を上げたり、神妙らしい四半刻（三十分）を過しました。それを吹き晒しの縁側から見ている信心気のないガラツ八の退屈さ——。

四

「ちよいと、親分さん」

「誰だい」

ガラツ八の八五郎は、好い心持に後ろを振り返りました。こんな調子で呼ばれるのは、あまり例のないことでもあり、それに、その声の仇つぽい美しさは、八五郎の五臟六腑に沁み渡る心持だったのです。

「茂七さんは人なんか殺せる方じゃありません。どんな事を言っても、あの人ばかりは疑わないで下さいな」

「そりや一体どういうわけだい」

ガラツ八は闇を透かしました。外は美しい月夜ですが、そのせいで建物の蔭になる中庭の暗さは一倍です。

「頼みましたよ、親分さん、悪者は外から入って、お神さんを殺して逃げたに違いありません、——その証拠は——」

仇つぽい声はそれつきり尻切蜻蛉になりました。誰か不意にやって来た人影に驚かさ

れた様子です。

「チエツ、勝手なことを言うぜ」

ガラツ八は大きい舌鼓を一つ、クルリと元の灯の方へ顔あかりを向けました。

「八、今のは誰だ」

「あ、親分」

いつの間にやら平次が、八五郎の後ろに立って、ニヤリとしていたのです。

「とんだ邪魔をしたようだな——たいそう仇っぽい声でしたが、あれは誰だい」

「それが解りませんよ、——何しろ中庭は真つ暗だ、——女には違いないが、新造しんぞか、年

増か、綺麗か醜いかの見当も付かねえ」

「何を言つたんだ」

「茂七は人を殺すような男じゃないから、疑われないようにしてくれと言うんで、——悪者は外から入つたに相違ないとも言いましたよ」

「すると下手人はやはりこの家の者かな」

平次は裏の裏を考えていました。

「とにかく、変な女ですね。あの声を聞くと、ぼんのくぼへ飴あめを垂らされるような、——

鼻の頭を羽毛で撫でられるような、背筋がモゾモゾするような心持になりますよ」
それ以上は二人にも解りません。

青物町の久三郎を誘つて、お米が殺されたという二階も見ましたが、階段が裏表にある上、部屋が並んで四つもある有様で、曲者にとつては四通八達の間取りです。

「これでは——」

平次もさすがに匙^{さじ}を投げました。

お米の刺された部屋は、畳の上の血潮もそのまま、何となく昨夜の不気味な情景を思い起させます。

「八、ここへ一人ずつ呼んでくれないか、最初は一番怪しい茂七だ」

平次は久三郎の無言の承諾を得ると、早速錢形流の調べに取りかかります。

「へエ——」

八五郎は通夜の席から、そつと居候の茂七を呼出して来ました。

「親分さん、御用だそうで——」

平次と久三郎へ等分に挨拶したのは、三十前後の恰^{かつぶく}幅の良い男、殺されたお米には遠縁に当るそうで、居候といつても、何となく寛^{かんかつ}闊な感じのする態度が、考えようでは横

着らしくもあります。

「お前と殺されたお神さんとは、どんな筋合になるんだ」

平次はこういつた平凡なことから始めました。

「私の叔父の従弟の、その嫁がお米さんで」

「さア解らない」

「まア、他人のようなものですよ」

「近頃、お神さんとの仲が面白くなかつたそうだね」

「へエ、——まア、私も悪いには違いありませんが、あんまり因業だから、ツイ、面白

くないこともあります。昨日も小遣がかかり過ぎるからとさんざんの大小言で、二た言

三言弁解を^{いいわけ}すると、今にも出て行け——と嵩^{かさ}にかかつて^{どな}吠鳴り散らすじやありませんか」

「それだけか」

「それだけかとおっしゃつても、私にとつちやそれだけじゃ済みません。三年越し店を手伝つて、奉公人並みに働きながら、一文も給金を貰つたことのない私が、たまたま齒磨きを使つたのが贅^{ぜい}だとか、手拭を買つたのが生意氣だと言われちゃ、我慢がなり兼ねます。

今晚すぐ出て行け——と言うのが、あんまり癩^{しやく}にさわるから、質^{ただ}で只みたいに取つた脇差

のうちから、一番光るのを持出して、脅かしのつもりで二階へ登って行くと――」

「……………」

茂七はさすがにゴクリと固唾かたずを呑みます。

「お神さんの部屋から飛出して、向うの裏梯子うらぼしごの方へ行く者があります」

「男か、女か」

「それが判りません。何しろ江戸一番の締り屋で、二階廊下が危ないのを承知の上で、どうしても有明ありあけを灯つけさせない人です」

「……………」

「何心なく部屋へ入ると、――驚いたことに、お神さんは、行灯あんどんの前に俯向きうつむになって死んでいるじゃありませんか」

「どうして死んでいると解った」

「そこら中が血だらけで」

「着物へ吸い取られて、大した血ではなかったというが」

「でも、一と眼で解りましたよ、――あんまりびっくりして、思わず大きな声を出すと、番頭さんが飛んで来ました」

「それから」

「お咲さんも来たようです」

「誰だい、お咲さんというのは」

「番頭の和助さんのお神さんで、——もっとも年は少し上だそうですが」

「それから」

「下女や、小僧も飛んで来ました」

「お夏は？」

「見えなかったようです。もっともしばらく経ってから来ました。何でも気分が悪くて、夕飯の後ですぐ寝てしまったそうです」

「それつきりか」

「へエ——」

茂七は何もかも言ってしまった安心さに、緊張のうちにもほっとした様子です。

五

次は番頭の和助、四十男ですが、日蔭の冬瓜とうがんのように青白くて、せいぜい三十五六にしか見えません。妙に華奢きゃしゃで、滑らかで、金貸の番頭には不向きらしく見えますが、案外こんな人柄のが、一番強したたかな魂を持っているのでしよう。

お米の手足になつて、ずいぶん残酷な取立てをするという評判をとつた人間です。

「親分さん、御苦労様で」

「番頭さん、幾つだい」

平次は妙な事から訊き始めました。

「本年は前まえ厄やくでございます」

「たいそう若く見えるね」

「御冗談で」

「ところで、お神さんが殺された時は、何をしていたえ」

「階下したに居りました。明日の取立てのことを考えていたところで」

「傍そばに誰も居なかつたのか」

「生あいにく憎誰も居りませんでした。こんな広い家ですから、六人や七人住んでいても滅多に顔を合せることもございません。それに亡くなつた主人は、無駄あかりな灯つを点けるのが大嫌い

で、夜分などは空家のようです。不自由といえれば不自由ですが、どうせ抵当流れに取った家で、買手が付かないと、越すわけにも参りません、へエ——」

和助は支配人らしく、いろいろと気を配ったことを言います。

「番頭さんの給料は」

「通つて年に十両の約束でございました。が取立ての具合では少々の歩合もありました。もつとも女房がこの家へ住み込まして貰つてからは、それが七両に減りましたが——」

「たいそう少ないようだが」

「へエ——」

「お前のお神さんは手伝つていたわけじゃないのか」

「お手伝いも致しましたが——」

女主人お米の徹底した吝りんしよく 嗇さく 振りはさすがに和助の口から言い兼ねた様子です。

「主人のお米さんが死ねば、この身上は誰のものになるのだえ」

「お夏さんでございましょう」

「お前は？」

「私はお暇になるのを覚悟しております」

「すると、主人が殺されて困るのは、番頭さん一人ということになるね」

平次の質問は妙に皮肉な調子でした。

「いえ、私も少しばかり給金の前借りがございますし、——誠に申しにくいことですが、親分さんの方の手で知れると面倒ですから思い切つて申し上げますが、——お神さんには内緒で、少しばかり費い込んだ金もございます」

「いくらだ」

「前借りは五十両ほど——私の五年の給料でございます。それに費い込んだのは、二三百両もございましょうか」

「あまり少しばかりではないぜ、番頭さん」

「へエ——、でも二十年も勤めて、七両や十両の給金では、私も世帯が持てません」
「フーム」

和助の真意は解りませんが、女主人お米を殺す動機だけは確かに持っていそうです。

その次に呼出したのは和助の女房のお咲、これは和助より三つ四つ年上なのと、すっかり世帯崩れの女房振りで、亭主とは十歳ぐらとおい違いそうに見えます。十七八貫もあろうと思う、煮しめたふろふきのような水つぽい女。

「……………」

何にも言わずに、白い眼で平次と久三郎を見上げながら、小刻みに貧乏揺ゆるぎをしているのでした。

「お咲さんといったね」

「へエ——」

「お神さんの殺されたことで、何か気の付いたことはないかえ」

「何にもありませんよ、親分さん方」

男のような太い声です。

「和助にろくな給料を出さなかったそうだから、お前もお神さんを怨うらんでいたろうな」

「へエ——、でも締り屋で通った方ですから、三度の物にありつけば、我慢が出来ないこともありませんよ」

貧乏摺れのした女房らしい諦ていかん観かんです。

「お前も給料無しで働いたそうじゃないか」

「その代り、役得もありましたよ」

「はて？」

「お神さんからお金を借りたい人は、みんな私ども夫婦の御機嫌をとったんですもの」
「なるほどな」

平次は妙な覺りさとを開きました。

六

養い娘のお夏も、一応二階の部屋へ呼込まれましたが、これは何を訊いても、最初は筋の通った事を一つも言いません。

「専次と一緒になるのを、どうしてもお神さんが聴かなかったそうじゃないか」

「……………」

「どうするつもりだったえ」

「この家を出るつもりでした」

僅かわずにあげた顔には、娘らしい純情が輝きます。こんなのが、思い詰めたら、心中もするだろうし、人を殺す気になるかも知れません。

それにしても、不思議に人を牽ひきつ付ける美しさでした。大して綺麗というわけではありません

んが、——これは多分、娘の純情的な性格からくる美しさかも知れません。

「お神さんが殺されていた時は、どこに居たんのだ」

「少し気分が悪くて、横になっていました。階下の、私の部屋で——」

「灯は？」

「点けません」

「専次のことで、もう一度相談するつもりで、二階へ行つたはずだが——」

「……………」

「先刻風呂場を覗いてみると、釜の中に赤い鼻緒の草履が、少し燃え残つてあつたが、——」

「その草履の裏に、何が付いていたか、お前は知っていたはずだ」

「……………」

お夏は青くなりました。

「みんな言つてしまった方がいいよ、——お神さんを殺したのを、お前だとは決して思わない」

平次の言葉に、仰天したのは、お夏よりもかえつて青物町の久三郎でした。それほどの証拠がありながら、お夏の無実を証明するような、平次の言葉が氣にくわなかつたのです。

「では、みんな申します。——あの晩、私は専次さんのことをもう一度お母さんにお願ひするつもりで、裏梯子をそつと登つて、二階の部屋へ行きました。お母さんが許して下さいらないと決れば、その晩のうちに、専次さんと一緒にこの家を逃出して、木更津きさらづの叔父さんのところへ行くはずだったのです」

「……………」

お夏の話は、思いも寄らぬものでした。

「部屋の障子を開けて、——私はよく声を出さなかつたと思います。お母さんは脇差を背中に突つ立てたまま、行灯あんどんの前に俯向きうつむになつてゐるじゃありませんか」

「脇差はたしかに背中に立つていたね」

「え、ギラギラしてよく見えました。——私はあんまりびつくりして、思わず飛込んで抱き起そうとしましたが、もうすっかり死んでゐるのに気が付いて、怖くなって立ち竦すくむと、表梯子をミシリミシリと鳴らして、誰か登つて来た様子です」

「茂七だろう」

「誰だか解りませんが、——私も姿を見られては悪いと思つて、どうしてそんな氣になつたか、今から考えると少しも解りませんが、——裏梯子から転ころげられるように飛降りました」

「茂七が二階で騒いだのは、それからすぐか」

「いえ、私が自分の部屋へ帰って、行灯に灯ひを入れて見ると、畳の上に血が付いているではありませんか、うっかり血の付いた草履を履いたまま、飛込んだのです。——何を考えるいとまもなく、雑巾でその畳と廊下を拭いて、草履を風呂場へ持って行って、まだ火の残っている釜の中へ入れると、——その時二階から茂七さんの声が聞えて来ました」

お夏の説明は次第に事件に明るさを添えて行きます。

「茂七は何と言った」

「大変だ、皆んな来てくれ、お神さんが殺されている——と言ったようでした」

「たいそう文句が多いようだが、間違いはあるまいね」

「え」

お夏は若い記憶力に自信を持っていそうです。

「もう一つ訊くが、その晩、専次が来なかつたのか」

「来たかも知れませんが、あんまりびっくりして、合図を聞き漏らしてしまいました」

「合図は」

「口笛で——でも昨夜は、お隣に尺八の復おさらい習ひがありましたから、口笛が紛れて聞えなか

つたのかも知れませんが」

「お前と専次の逢あひびき曳ひきを、家の者は誰も知らないのか」

「知っていて知らん顔をしているのかもわかりません」

これがお夏から聴き出した全部ですが、事件の真相は、次第に解ってくるような気がします。お夏の言ったことを条件書にすると、――

少なくとも、「死体には最初脇差を突き刺したままであったこと」、「その血刀を誰かが引抜いて、どこかへ隠してしまったこと」、「ちょうどその時刻に、専次が来るはずであったこと」、それから、「お夏と入れ違いに二階へ登った人間のあること」、「茂七がピカピカする脇差を持って、二階で騒ぎ出したのは、それからかなり経った後であること」――以上の通りになるわけです。

最後に下女と小僧を呼出して調べましたが、これは灯のない店とお勝手に居いねむ睡りしていつても知らず、ただ変わったことは、

「お神さんは、来年は五十五だというのに、近頃は大変若造りで、そつと白おしろい粉こなを付けたり、髪を染めたり、思い切つて派手なものを着るようになりましたよ」

これは下女の言葉です。六十の方へ近くなる老女の化粧が、女同士の下女に変な眼で見

られるのはあまりにも当然のことでした。

「八、何刻なんどきだろう」

平次はフト顔を挙げました。どこかの鐘が鳴ります。

「亥刻半よつ（十一時）、いや子刻このつ（十二時）でしょうよ」

「夜中だな、が、岡つ引に時刻はない、もう一と働きしようか」

「一と働きでも二た働きでもやりますよ」

「それじゃ来い、夜の明ける前に片付けよう」

平次は月を踏んで飛出しました。続くガラツ八、青物町の久三郎、すっかり平次にリードされて、もう縄張も年の功も忘れてしまった様子です。

「どこへ？ 親分」

「丸屋で訊いちやまずいから、黙って飛出したが、専次の家はどこか判らないが、自身番へつれて来てくれ」

「合点」

ガラツ八は飛びました。

七

それから間もなく、建具屋の専次は、八五郎に連れ出されて、真夜中の自身番に待つて
いる、平次の前へ眠そうな顔を持って来ました。

「お前は専次か」

「へエ——」

挙げた顔、少し面喰らつてブーツとしていますが、二十二三の色の浅黒い小意気な男で、
江戸の町娘のお夏が夢中になりそうな型です。

「あの晩のことをみんな言つてしまえ」

平次は高飛車に極め付けました。

「へエ——」

「白ばつくれちやいけねえ。手前てめえが隠し立てすると、お夏の首に縄が掛るぞ」

「……………」

平次に脅かされながらも、専次の首は深々と垂れるばかり、一言も物を言う様子はあり
ません。

「八」

「へエ」

「耳を借せ」

平次は何やら八五郎の耳に囁くと、

「やってみましょう、待っていて下さい」

ガラツ八は猟犬のように飛出しました。

それからしばらく、平次と専次の睨み合いが続きます。

「どうだ、証拠を突付けられてからじゃ、手前の損だぞ、今のうちに、みんなブチまけたらどうだ」

「……………」

「俺は何もかも知っている。尺八の復習から抜け出して、どこへ行った」

「……………」

平次の答を空耳に聞いて、専次は一言の応えもありません。

「親分、あった、これでしよう」

飛んで来たのは、ガラツ八でした。平次の手へ渡したのは、尺八を入れた鬱金木綿の袋。

「これだ、どれ、灯を貸してくれ」

行灯の側へ持つて行つて、紐ひもを解くと、中から出て来たのは、籐とうを巻いた尺八が二管。

「あッ、血？」

ガラツ八の驚いたのも無理はありません。尺八の籐に喰い込んで、微かすかながら斑はん々々と残るのは紛れもなく古い血潮の痕あとだったのです。

「専次、これでも黙っている気か、血刀を誰の手から受取つて、この袋の中へ隠した」

「……………」

「口笛を吹いて合図した時、お前に血刀を渡した者があるはずだ、——お夏ではあるまい。お夏が見た時は、刀は死骸に突つ立つていたはずだ。お夏はそれを抜いてお前に渡すはずはない、お夏がお前に血刀を渡したなら、下手人は間違ひもなくお夏だが、血刀を渡したのが他の者なら、下手人はお夏でない」

平次の推理が手厳しいうちにも、専次を安心に導く様子でした。

「……………」

「俺は最初、下手人はお前かも知れないと思つた。お夏が刀を隠したなら、お前が下手人だ」

「……………」

「お前が下手人なら、一度お米を刺しておいて、また刀を取りにあの家へ入るはずはない」
「……………」

「下手人は、お前でも、お夏でもない。これはみんなお前やお夏に疑いをかける細工だ」
平次の推理は次第に専次の頑固な心を動かして行きました。

「本当でしょうか、親分、お夏に疑いは掛らないでしょうか」

「大丈夫だ、俺が引受ける、この平次がお夏を引受ける、——血の付いた脇差をお前に渡したのは誰だ、言ってくれ」

「茂七ですよ、親分」

「何？」

「私が口笛の合図をすると、裏口へ茂七が出て来て、——お夏が間違いを起した、親殺しにされちゃ気の毒だから、この血刀をどこかへ隠してくれ、あとの始末は俺が引受けるから——と言つて、生血の付いた脇差を渡しました。あんまり驚いて口も利けなかつたので、そのまま尺八と一緒に袋へ入れて、しばらく皆んなの相手をして時を過し、そつと脱け出して脇差は江戸橋の下へ投^{ほう}り込み、尺八もよく洗つたつもりですが——」

「何だつて、その翌^{あく}る晩心中する気になつたんだ」と平次。

「お夏が縛られるかも知れないと言つて、私のところへ来たので、てつきり、下手人はお夏と思ひ込み、永代まで行つて飛込むつもりでしたが、八五郎親分に止められて——」

「その先は判つた」

平次はそこまで聴くと、専次を歸して物思いに沈みます。

「親分、下手人は茂七に決つたじやありませんか、すぐ手を廻しましょう」

「いや」

平次は首を振ります。

「青物町の親分は、飛んで行きましたよ」

ガラツ八はこの手柄を、久三郎に横取りされるのが心外そうでした。

「放つておけ、——茂七が下手人なら、何だつて、もう一本の新しい脇差なんか抜いて、死体のある部屋へ二度目に飛込んだんだ」

「誤^{ごま}魔化^{まか}した、親分、茂七の芝居じやありませんか」

「いや、自分で殺しておいて、血刀を専次に隠させ、新しいピカピカする脇差を抜いて、

もう一度死骸のある部屋へ入るのは、少し細工すぎると思わないか」

「……………」

「それに、あれは腹の良い男だ、和助と違つて——」

「和助とどこが違つているんで？ 親分」

「もう一度丸屋へ行つてみよう」

平次はガラツ八を従えて、夜半過ぎの街を、丸屋へ引返しました。通夜があるにしても、家の中が宵とは比べものにならぬほどザワめくのは、青物町の久三郎が、茂七を縛つたためでしょう。

八

「番頭さん、少し訊き残したことがあるが」

「へエ」

和助は恐る恐る平次に導かれて、人気のない部屋に入りました。

「他じゃない、番頭さんの配つれあい偶——お咲さんは確か、元立派な芸人だったはずだね」

「立派な芸人と申すほどじゃございませんが、若い時分に旅の女役者だったことがあります。三十過ぎて水仕事をするようになってからはあの通り女角力すもうのように肥ってしまいました。あれでも若い時がありましたよ、へエ」

和助は苦笑いをするのでした。この男の華奢なのに比べて、お咲はまた、あまりにも醜く肥っております。

「もう一つ、これは少し言いにくいことだが、番頭さんはこの一年ばかり、主人のお米さんに可愛がられすぎたようだね」

「……………」

和助は黙って俯向うつむいてしまいました。

「それを見張るつもりで、番頭さんの配つれあい偶のお咲さんが、世帯を畳んでこの家へ入り込んで来たのだろう。主人のお米さんはそれが気に入らなくて、お咲さんをただコキ使った上、番頭さんの給金まで減らした、食い扶持を差引くつもりだったのだね」

「……………」

「返事がなければ、そう思つて差支えはあるまい」

和助の萎しおれる姿を見て、平次は立上がりります。

「親分、これからどうなるんで」

ガラツ八はぼんやりその後に従いました。

「これつきりさ——茂七に逢つて、たつた一と言訊きさえすればいい」

平次は久三郎を追つてもう一度番所へ、あけ暁近い街を歩きました。

「銭形の、お蔭で下手人を縛つたよ。まだ白状はしないが、なアに、石を抱かせるほどのことはあるまい」

仮縄を掛けた茂七を引据えて、青物町の久三郎はこんな事を言うのです。

「青物町の、俺に一つ二つ訊かしてくれ、茂七でなきや知らないことがあるんだ」

「あ、いいとも」

久三郎の寛大さを可笑しくおか見て、平次は茂七の側に寄りました。

「茂七、つまらない我慢は止よした方がいいぜ、——お前はお夏をかば庇っているようだが、下手人はお夏なんかじゃないよ」

「……………」

平次の言葉を不思議そうに見上げる茂七です。

「あの晩、お前がお米にねじ込むつもりで二階へ行くと、お米の部屋から、飛出して来る

お夏の後ろ姿を月明りで見たはずだ、——廊下に灯はないが、高窓から、月がよく射している——昨夜は月がよかった」

「……………」

「部屋に入ってみると、お米は殺されている、お前はつきりお夏の仕業だと思った、——無理もない話さ。お前はお夏を庇ってやる気で、死骸の背中から刀を抜いて、どこかへ隠そうと思つて外へ出ると、専次がお夏と逢曳するつもりで、口笛で裏口から合図をした、——お前はその血刀を専次に隠させる気になつた心持もよく解るよ——専次はお夏のためならどんな事でもする」

「……………」

茂七は始めて平次の顔を仰あおぎました。何やら疑惑が、その眼の中に動きます。

「それから引返してお前は考えたはずだ。あの家の中で女主人のお米が殺されると、疑いは一番先に、その日大喧嘩をしたお前にかかつてくる、その疑いを解くためには、下手人のお夏を引渡すか——それはお前に出来なかつた、お前は心の中で本当にお夏を可愛がつている、——無理もないよ、お夏は誰にでも可愛がられる娘だ」

「……………」

「が、自分で罪を引受ける気にもなれない、——思い付いたのはあの逆手だ、大ナマクのギラギラする脇差を持出し、二階へ登って大声を出した。その方がかえって疑われずに済むと思つたのだろう、——そう考えると、お夏が二階でお前に逢つてから、お前の騒ぐ声を聴くまで、かなり間があつたというのも解つてくる」

平次の説明は寸毫の隙もありません。

「下手人は、親分、本当の下手人は誰で？」

茂七は始めて口を開きました。救われた色が、活き活きとその眼に新しい輝きを添えます。

「亭主とお米の仲を疑つたお咲だよ」

「えッ」

茂七よりも、ガラツ八と久三郎の方が、どんなに驚いたことでしよう。

「茂七を下手人にするのが気の毒になつて、芝居風な仇つぽい台詞で、中庭の闇から八を口説いたのはあの女さ、あれでも昔は役者だ」

「……………」

「主人のお米に怨みは山ほどあつたはずだ。亭主の和助の費い込みは露見しかけていたし、

自分は奉公人よりもひどくコキ使われて一文の給金も貰わなかった」

「……………」

「お米を刺した脇差はたぶん和助のだろう。拔身ぬきみを持出して、裏梯子から登り、お米の背後から一と思いに刺し、下へ降りたところへお夏が行ったのだ、——脇差の鞘が、たぶん和助の荷物か、あの女の荷物の中にあるだろう。それとも焼いてしまったかも知れない、土竈へつついと風呂場をもう一度捜すことだ、燃えさしぐらいはあるだろう」

「親分、夜の明けないうちに、行つてしよつ引きましよう」

ガラツ八は立ち上がりました。

「いや、もう少し待つ方がいい、——あれ、丸屋の小僧が飛んで来るじゃないか」

平次の指した暁あかつきの街を、小僧は前のめりになつて飛んで来るのです。

「た、大変、お咲さんが」

「逃げたか、それとも死んだか」

「物置で頸くびを縊くつて——」

「それでいい」

平次は深々とうなずきました。

「親分、知っていたんで？」

とガラツ八。

「知っていたわけじゃないが、俺が和助からいろいろの事を訊き出すのを、あの女は襖ふすまの蔭で立ち聞きしていたよ。逃げられると少し困ると思ったが、——やはり根が悪人じゃなかったんだ」

平次は悲しそうでした。そう言う息は白々と見えて、次第に明ける冬の朝、——ガラツ八はぞつと襟をかき合せます。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（五）金の鯉」嶋中文庫、嶋中書店

2004（平成16）年9月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第四卷」中央公論社

1939（昭和14）年

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1937（昭和12）年12月号

入力：山口瑠美

校正：noriko saito

2017年9月13日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

二本の脇差

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>